

# 児童英語教育指導員養成コースにおける省察的実践の試み Reflective Practice in 'English for Young Learners Course'

平 田 恵 理

福岡女学院大学 教職支援センター  
教育実践研究 第8号 抜刷

(2024年3月)

# 児童英語教育指導員養成コースにおける省察的実践の試み Reflective Practice in 'English for Young Learners Course'

平 田 恵 理

## 1. はじめに

本稿は、2022年度・2023年度の福岡女学院大学の児童英語教育指導員養成コース内の授業「English for Young Learners Fieldwork（児童英語フィールドワーク）」と「English for Young Learners Seminar I（児童英語指導法演習 I）」の省察的実践の取り組みを報告し、児童英語教育指導員養成コースの可能性と今後の課題に関して考察するものである。具体的には、2022年度・2023年度（前期）の上記2つの授業における実践の概括と受講者を対象とした授業後のアンケート分析を基に、コースにおける省察的実践の教育的意義や利点を議論し、今後の課題について検討する。

## 2. 児童英語教育指導員養成コースと省察的実践

福岡女学院大学の「児童英語教育指導員養成コース」は、人文学部と国際キャリア学部国際英語学科の学生が履修できるコースである。教育学、言語学（英語学）、比較文化、英語コミュニケーション（異文化理解）、児童英語教授法（指導法）の分野から所定の単位を修得し、条件を満たした場合には、本学独自の修了証を発行の上、「児童英語教育指導員」の資格が認定される。

このコース内の必修科目の中でも核となるのが、児童英語の教授法の区分で開講されている児童を対象とした指導法や実践に関する授業である。コース履修生は、入門的な授業として2年次配当科目の「English for Young Learners Methodology」（これ以降「EYL Methodology」）を履修し、児童英語教育の教授法とその理論背景や子どもの学習過程、発達に適した活動のあり方やスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングの4つのスキル別の指導法、教室運営のあり方などについて、授業内での模擬授業などの実践的な活動を体験しながら学ぶ。その後、3年次配当科目の前期科目「English for Young Learners Seminar I」（これ以降、「EYL Seminar I」）と後期科目「English for Young Learners Seminar II」（これ以降、「EYL Seminar II」）を履修し、授業計画の仕方と指導案の作成方法や児童に適した教授法などについて、模擬授業を通して実践的に学んでいく。そして、受講生は通常同じ年度に「English for Young Learners Fieldwork I／II」（これ以降「EYL Fieldwork」）を履修し、実際に小学校に行き、グループで英語

を教える経験を通して、総合的な教育実践力を身につける。このように、学内での授業に留まらず、児童英語教育現場での経験を通して教育実践力を養うことを目指しているのが、本コースの特徴である。

近年、小学校外国語教育の本格的な導入に伴い、学級担任が外国語活動・外国語の授業を担当する割合の減少とともに、専科教員や他学級の学級担任などが担当する割合が増加している（文部科学省，2020）。「令和4年度英語教育実施状況調査」（文部科学省，2023）によれば、外国語教育を担当する教員は学級担任（93,008人，58%）が主に行なっている状況が多数を占めるものの、専科教員等の教員（34,216人，21.3%）や、授業交換などで同学年他学級担任や他学年学級担任（12,362人，7.7%）が担当するケースも増えている（文部科学省，2023）。

上記に示した近年の状況と、多忙を極める教育現場の現状を鑑みると、今後ますます児童英語教育を専門的に学習した教員の必要性は高まっていくことが予想される。本学の現状から児童英語教育指導員養成コースのみではなく、中・高等学校の英語教職課程も同時に履修している学生が多いことを考えると、教授法や小学校における英語教育の現状についても学び、児童に適した指導法を踏まえた上で、中学校や高等学校で指導に当たるのは望ましいことであると考え。また、上に述べた通り「EYL Fieldwork」で小学校にて外国語活動の実習の機会が設けられていることは本コースの特徴であるが、このように養成の段階から教育現場での実習等の体験を振り返り、その経験を踏まえてさらに学びを深めていくことは益々重要となっている。特に、指導の質の向上や指導者の成長のための省察的实践（Reflective Practice）の重要性についてはこれまでに多くの研究がなされている（Gregersen & Mercer, 2022, Kiely & Davis, 2010, Mann & Walsh, 2017, Farrell 2019, 等）。例えば、Farrell（2019）は、省察的实践を教員養成へ組み込む方法を提案している。具体的には、1）対等な立場で客観的な観点から指導などについて助言しあう「critical friendship」の構築や、2）チームティーチング（team-teaching）、3）指導に関して協力的な雰囲気の中で助言をし合うピアコーチング（peer-coaching）や4）建設的な対話を行うこと（dialoging）、5）実際の教育現場に赴き、実践を経験して学ぶこと（service-learning）そして6）教室内で起こった事例について分析・研究することなどを通して学生たちを省察的实践者へ導くことが可能になるとしている。また、Gregersen & Mercer（2022）は、協働的な省察をする際には、改善点のみに焦点を当てるのではなく、指導者の強みや良い面を再認識することが重要であり、それが参加者の自信、自己効力感、自己概念をより高めるとしている。また、これらの多くの省察的实践に関する先行研究において、個々で省察するのではなく、実践者同士が協働してお互いの実践について話し合うこと（Kiely & Davis, 2010）や、対等な立場で客観的な観点から助言しあうことが重要であり、同じような境遇の仲間と建設的なフィードバックの対話や省察を繰り返すことによって、指導に対する理解が深まり、探究的に実践に関わることや指導者の

成長に繋がると報告されている（Farrell, 2019）。

本稿では、福岡女学院大学の児童英語教育指導員養成コースに於ける2022年度前期・2023年度前期開講の「EYL Seminar I」と「EYL Fieldwork I」を履修した受講者を対象に行った受講後のアンケート調査に基づき、コースにおける受講者の省察的な学びとその課題について考察する。下記に、具体的に各授業の内容と得られた調査結果を示していく。

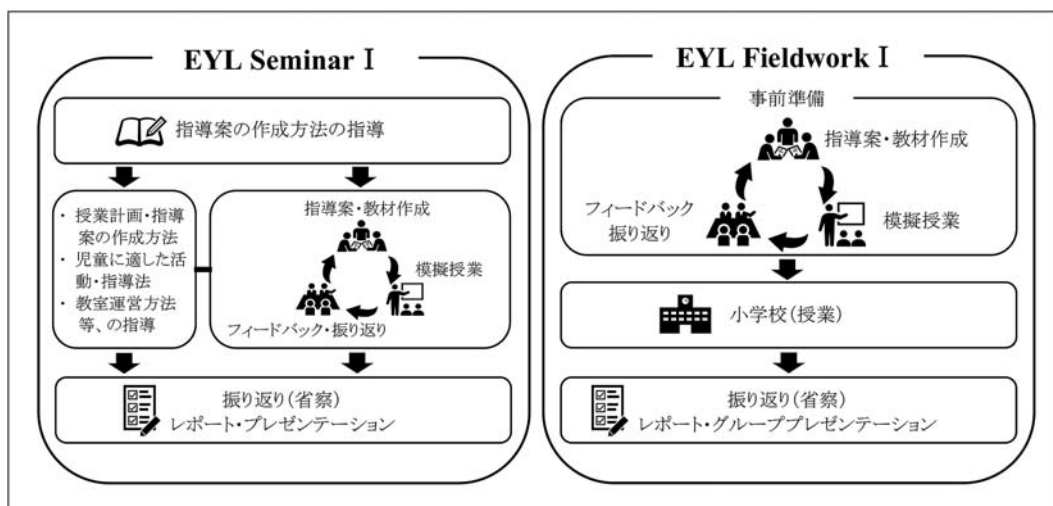
### 3. 研究方法

#### 3.1 対象授業について

前述の通り、児童英語教育指導員養成コース内において前期科目「EYL Seminar I」と「EYL Fieldwork I」を履修する前に、コース受講生は通常、前年度に「EYL Methodology」の授業で児童英語教育に必要な知識を学んだ上で参加することになっている。「EYL Seminar I」については、学内での授業で、授業計画や指導案の作成方法や児童に適した活動や指導法を学び、前述の「EYL Methodology」で学んだ内容を、各自が計画した模擬授業などを通して体得していくことを目的とした科目である。「EYL Fieldwork I」については、小学校の児童を対象に英語活動の指導を行い、実践を通した学びを提供することを目的とした科目である。小学校での実習時には、外国語活動で使用されている教材「Let's Try!」の小学校から指定のあったユニット内に関連した内容で、児童にとって必然性のある言語活動を計画し、授業をすることが求められる。

前述の通り、「EYL Fieldwork I」の受講生は、「EYL Seminar I」も同時に履修しながら、それぞれの授業に参加している。各授業の活動の概要については【図1】を参照されたい。

課題の設定に関しては、いずれの授業においてもそれぞれにGoogle Classroomを指定の上、



【図1】「EYL Seminar I」・「EYL Fieldwork I」活動内容

グループ毎に授業計画の作成や共有や毎回の模擬授業後に行う受講生相互のフィードバックや各自の省察（振り返り）を書き込みができるように設定していた。

2022年度の「EYL Fieldwork I」については、コロナ禍の影響が残っていたこともあり、特に前期は感染状況によりオンラインでの対応となった場合にも対応できるように準備が求められていた<sup>1</sup>。このような事情もあって、準備については通常の教室で行う想定とオンライン（Google Meet）で繋いだ上での授業の場合の二つのパターンを想定した上で準備しなくてはならなかった点で若干の違いはあるが、2022年度・2023年度、両年度ともに小学4年生を対象とし、外国語活動用教材「Let's Try! 2」の「Unit 3, I like Mondays」の箇所にて「好きな曜日を聞き取る活動」と「好きな曜日をお互いに尋ね合う活動」を主な言語活動として準備した。

### 3.2 参加者について

本コースの2022年度（前期）、2023年度（前期）の受講者の内訳は【表1】を参照されたい。「EYL Fieldwork I」を受講した学生は、同時に「EYL Seminar I」を受講している。尚、「EYL Fieldwork II」については、後期にも開講されており、一部の学生は後期に受講する。同時期の開講でこれらの科目の受講人数が異なるのはそのためである。

【表1】受講者人数

開講期	EYL Fieldwork I	EYL Seminar I
2022年度 前期	11名	17名
2023年度 前期	10名	16名
合計	22名	34名

### 3.3 アンケート調査と分析方法

各学期の授業最終日に受講者に本コースに関する研究の趣旨について説明し、不参加の場合にも不利益を受けることはないことを説明した上で、任意のアンケートを実施している。本稿では、個人情報とは匿名化され、個人が特定されないことを前提とし、研究活動への利用に関して承諾を得られた回答を基に報告をする。有効回答数は「EYL Fieldwork I」についてはn=21（回答率95.5%）、「EYL Seminar I」についてはn=33（回答率97.1%）である。

本稿で報告する2つの科目は、前述の通り（参照【図1】）、授業計画・指導案の作成や模擬授業など活動面で共通する部分もあるものの、其々別の科目であり、評価の項目は異なる点もあることから、それぞれの授業でアンケートを実施し、項目毎に5段階（1. 全く当てはまらない、

<sup>1</sup> 実際に前年の2021年度（前期）は、授業担当の受講生は児童と同じ教室には入室せず、別室から各教室とGoogle Meetで繋いだ上でオンラインで授業を行っている。

2. あまり当てはまらない, 3. どちらともいえない, 4. 当てはまる, 5. 非常に当てはまる) から最も当てはまるものを一つ選んで自己評価をしてもらった。また、各授業内の取り組みにおける学生の学びがより深く理解できるように、いずれのアンケートに於いても自由記述形式の項目を設けた。そしてアンケートの最後に、筆者が指定した項目以外に受講者が本授業の学習で感じたことや学んだことなど任意で自由に記述できる回答欄も設けた。以下にアンケートの結果と考察を示す。

## 4. アンケート結果および考察

### 4.1 授業の取り組みに関する学生の自己評価

まず、各授業の自己評価（5段階）の結果について報告する。結果は「EYL Seminar I」（【表2】）と「EYL Fieldwork I」（【表3】）を参照されたい。下記の表からわかるように、いずれの科目に於いて、どの項目も平均値が高い傾向にあり、各科目の到達目標に関連する項目に関し

【表2】「EYL Seminar I」の取り組みに関する学生の自己評価

No.	項目	M	S.D.	回答 (%)				
				1.	2.	3.	4.	5.
1	十分に準備をして授業に臨んだ	4.45	.56	0.00	0.00	3.03	48.48	48.48
2	グループで協力して授業を計画することができた	4.67	.59	0.00	0.00	6.06	21.21	72.73
3	児童（レベル等）を想定して活動や教材を工夫した	4.58	.55	0.00	0.00	3.03	36.36	60.61
4	授業計画について理解し、授業計画の立て方を習得できた	4.73	.45	0.00	0.00	0.00	27.27	72.73

n=33 (回答率 97.1%)

【表3】「EYL Fieldwork I」の取り組みに関する学生の自己評価

No.	項目	M	S.D.	回答 (%)				
				1.	2.	3.	4.	5.
1	十分に準備をして授業に臨んだ（毎回の大学内での授業も含む）	4.67	.89	4.76	0.00	0.00	14.29	80.95
2	グループで協力して授業を計画することができた	4.52	.79	0.00	4.76	4.76	23.81	66.67
3	子供達の反応を見ながら臨機応変に対応した	4.81	.39	0.00	0.00	0.00	19.05	80.95
4	子供達に合わせて教材を工夫した	4.81	.50	0.00	0.00	4.76	9.52	85.71
5	積極的に子供と関わる事ができた	4.86	.35	0.00	0.00	0.00	14.29	85.71
6	自身の英語力の向上を意識して努力した	4.48	.50	0.00	0.00	0.00	52.38	47.62

n=21 (回答率 95.5%)

て学生の自己評価が高いことがわかる。

#### 4.2 「EYL Seminar I」：授業計画・指導案作成や模擬授業を通した学び

「EYL Seminar I」の到達目標の一つでもある授業計画や指導案の書き方等についても、全ての学生が「非常に当てはまる」(72.7%)もしくは「当てはまる」(27.3%)を選択していた。また、同様に「EYL Seminar I」では授業計画後に模擬授業を他の受講生の前で行う機会があるが、自由記述形式項目の「児童を対象とした授業用に教材作成や模擬授業を通して学んだこと」については、下記のコメントにあるような、他者の前で模擬授業をすることで自ら気づきがあったという記述が多くあった。

- 模擬授業を実際に行ってみると「この部分はこうすれば良かった」など、考えたアクティビティや授業に後悔した部分があり、実際に授業をしてみないと自分では気付けないことが沢山あることに気付いた。(No. 20)
- 模擬授業では自分が思っていた通りにいかない場面も多く、想像していた反応と違うこともあるのでその場で児童の反応をみながら臨機応変に対応することの大切さを学んだ。また、事前にあらゆるパターンを予測しておくことや準備が特に大事であるように感じた。(No. 25)

また、大学内での模擬授業に於いては、毎回実施後に Google Classroom 上でフィードバックを書き込む課題を模擬授業ごとに取り組むように設定していたことから、自身の授業への他者からの指摘から得たものや、他者の模擬授業に参加したことで得られた学びについての記述も複数見られた。

- 模擬授業をするたびにフィードバックをすることでその都度改善したものを次の模擬授業で体験できるので、他グループの良いところを参考に取り入れることができました。何度も模擬授業を繰り返した結果、修正点や改善点を見つけることができより良いものが作れたのだと思います。模擬授業を何度も繰り返し経験することはとても大切な事なのだと学びました。(No. 2)
- 自分がデモレクソンをすることで、他のグループや先生から客観的な意見をもらうことでさまざまな気づきがありました。また、他のグループのデモレクソンからもヒントを得ることができて自分たちのグループでも取り入れることができました。(No. 6)
- みんなのデモレクソンを受けたり、フィードバックを受け取るなかで、自分では気付かなかった部分を知れたり、もっと良くする為にはどうしたら良いのかを学ぶことができました。とても良い刺激がある良い環境で学ばせて頂き、初回の授業に比べると大きく成長出来たのではないかと思います。(No. 14)



- ・ 模擬授業では、対象が大学生だったので実際の小学校での授業を想定して行うのが難しいと感じた。しかし、大学生が対象であるからこそ客観的に自分たちの模擬授業を見て改善点を指摘してもらえるのはとても良いと感じた。(No. 23)
- ・ 模擬授業などの発表はとても緊張しましたが、*peer-feedback* で良かった点や改善点について詳しく書いてくださっていたので、自己理解ができて良かったです。また、他のクラスメイトの発表を聴くことで「もっとこうしてみよう！」と自分の授業づくりに取り入れられたのが勉強になりました。(No. 24)

上記のコメントから、同じコースに所属する学生同士、お互いに学びあう建設的な環境が構築できていたことが窺える。また、Google Classroom（オンライン）上で、参加者であればいつでも書き込むことができ、他者からのコメントを参照できる状態にあったことも個々の協力的省察の実践（Farr and Riordan, 2017）に繋がったものと考えられる。

#### 4.3 「EYL Fieldwork I」：経験から学んだこと・成長したこと

次に、「EYL Fieldwork I」の経験から学んだことや成長したと思えることに関しての記述は次の三点 1)「他者との協働」、2)「臨機応変（柔軟）に対応する力」、3)「人前で授業をすることに抵抗感を感じなくなったこと」が複数の参加者からの回答で見られた。

1 点目の他者との協働に関しては、グループ単位で授業を行ったことが関係しており、良かった点や改善できる点について繰り返し仲間との意見交換することや、共に協力・補完しながら取り組むことの大切さを認識しているコメントが見られた。

- ・ 本番を終えた今、あの繰り返しの練習や修正、遅くまでメンバーと話し合ったことは意味のあるものだったと強く実感しています。授業本番、ほとんどスムーズにいき、予想しなかった出来事にも機転をきかせ対応することができました。… 子供たちの笑顔が見られた時は非常にやりがいを感じました。より良い授業ができたのは、沢山の練習があつてからのものだと思います。(No. 1)
- ・ グループの人たちと、それぞれが得意なことを活かしたり、お互いに足りないところを補ったりすることで、連帯感をもち責任をもって最後まで成し遂げることの重要性を学んだ。(No. 7)

前述した「EYL Seminar I」のクラスと同様に、「EYL Fieldwork I」の大学内で行う毎回の模擬授業の後にもグループ毎にフィードバックを書き込む課題を設けていた。同じくコースに属する仲間たちと、さまざまな観点から意見交換や模擬授業や教材に関してフィードバックから改善点を見出し、修正や工夫を重ねた経験が成長に繋がったという記述も多くみられた。

- ・ 小学校の実習でここまで達成感を味わうことができたのは、グループのみんなに限らずクラ



ス全員で最後までアドバイスをしあい、作り上げたものがあったからだと思います。(No. 3)

- このコースを通して、同じコース同士でのチームワークを大切にし、失敗してしまった点をそのままにするのではなく、すぐに相手の意見を聞き、探求し改善策を得るという能力を鍛えることが出来ると考えます。(No. 22)

これは、対等な立場で客観的な観点から助言し合い、お互いに成長しあえる関係性「critical friendship」(Farrell, 2019 p. 40) が構築されている証左であると言える。

また、通常、「EYL Methodology」や「EYL Seminar」などの大学内で行う模擬授業では時間の制約もあり、模擬授業の後、フィードバック後に振り返り、良かった点や改善点を検討することで終わるケースが多いが、「EYL Fieldwork I」については、改善を重ねた上で実際に児童との実践の機会がある点で大学内のみでの模擬授業とは異なる。下記のコメントからもわかるように、児童に教える機会があることで責任感が生まれ、児童の取り組みや反応から得られるものも多かったものと推察される。

- 教材は作成するたびに改善点があり、作り直しが必要だったが、最終的に児童が喜んで取り組んでくれた姿を見て感動した。コロナ禍で実習に行けるかオンライン授業になるかハラハラしたが、無事に実習に行けてとても嬉しかった。貴重な体験ができたことに心から感謝している。(No. 7)
- 準備をする段階では終わりが見えず苦しい部分があるが、改善を重ねたあと小学校に行き、生徒と接することによって大学の授業内では感じることでできない達成感ややりがいを感じることができると思う。(No. 26)

他者との協力を通して改善を重ねたことが、受講者が実践の場で「柔軟に対応する力」に繋がったとするコメントも複数見られた。授業準備の段階においてグループの仲間と色々な場面を想定していたことも助けになったのであろう。そしてそのような仲間との協働や過程が下記の回答にあるように、実習後の「達成感」や「成長」を感じる一因となったものと考えることができる。

- 小学校の実習でここまで達成感を味わうことができたのは、グループのみんなに限らずクラス全員で最後までアドバイスをしあい、作り上げたものがあったからだと思います。(No. 3)
- 小学校に行く(本番)までに、パワーポイントを12回修正したが、一番最初に作ったスライドと最後に作ったスライドを比較すると、凄く見やすくなっていて、成長や達成感を感じた。修正などで大変な思いをしたこともあったが、グループのメンバーと一緒に成長し、一つの授業を作り上げて本番を成功させることができ、良い経験ができて良かったと思った。(No. 20)

2点目の「臨機応変に対応する力」に関しては【表3】にもあるように、項目「子供たちの反応を見ながら臨機応変に対応した」( $M=4.81$ ,  $S.D=.39$ )に於いては「当てはまる」(19%)

もしくは「非常に当てはまる」(81%)と回答している。既に紹介したコメントにもあったように「予期しなかったことにも対応することができた (No. 1)」や、模擬授業の当初は使用していた原稿(スクリプト)や授業計画についてのコメントが見られた。

- ・ 実際にスクリプト通りにするより、ある程度道筋は考えておいて、あとはその時の自分の言葉で伝えることが大切だと気づくことができました。(No. 8)
- ・ 実習に行く前は、計画通りにしっかりと間違わないように授業をしなければいけないと考えていたが、実際に子どもたちの反応を見て、教えるだけでなく子供たちと一緒に楽しみながら学ぶ方が子どもたちの理解につながるということに気づいた。

コメントにある通り、実際に各学期の初めの段階では、多くの学生がスクリプトを準備して模擬授業に臨んでいたが、学内で模擬授業をする際にそのスクリプトを見ずに、児童役として参加する学生とのやりとりを意識することを促し、練習を重ねた結果、実際の実習の際の児童との授業では原稿などを見ることなく、児童の反応に応じて授業を行うことができていた。コメントからもわかるように、受講者自身も原稿なく柔軟な対応ができたことに気づき、自身の成長を感じることができたようである。

また、「EYL Seminar I」の模擬授業に関する項目でも同様の言及があった通り、繰り返し授業内でもグループ毎に模擬授業を重ね、他の受講生や教員の前で授業をする機会が多く、客観的な意見をもとに改善に繋がったことも学生の成長に繋がったことが窺える。関連して、特に言及の多かったのは、複数回の模擬授業や実習を経験したことで「人前に立つことへの抵抗感がなくなった」ことである。

- ・ 人前に立って何かを発言する力、相手に分かりやすく説明する力を身につけることができました。(No. 6)
- ・ 私は人前で発表することに苦手意識があったが、このフィールドワークの授業で毎週前に出て練習したり、実際に子ども達の前で授業をしたりしたので、他の授業で前に出てプレゼンをした時に、前に出て発表することに対しての苦手意識が無くなり、堂々と発表できるようになった。(No. 20)
- ・ もともと人前で話すことに苦手意識があり、多くの人数の前で発表することに緊張してしまいましたが、この前期の授業を通して、二年生の時よりはだいぶ発表に慣れたと思います。人前での発表や説明を何度も経験したことで、成長できたと実感しています。(No. 24)
- ・ 授業前に比べてだいぶ人前で発言できるようになったと実感しています。まず、グループという少人数の間で意見を出し合い、それをまとめてクラス全体の前で発表するという活動がとても良い経験になりました。(No. 15)

上記、No. 15のコメントに見られるように、毎回の発表(模擬授業)に参加することで、人前

での発言ができるようになったことに加えて、グループでのチームテッチングという設定であったことが肯定的に捉えられているコメントも複数見られたことから、このような設定が、受講生に安心して参加できる環境を与えた可能性が示唆される。

#### 4.4 児童英語教育指導員としての課題

最後に、「EYL Seminar I」のアンケートで受講生がそれまでの学びを振り返り「児童英語教育指導員としての自身の課題」に挙げたものを示す。主には「児童の学びに適した授業計画・教材作成」(n=5)、「模擬授業」(n=6)、「臨機応変(柔軟)な対応力・児童のレベルに応じた指導・状況を察する力」(n=16)、「英語力・コミュニケーション力」(n=10)、「人前に立つことになれる」(n=2)、「子どもたち一人一人への配慮・寄り添う力」(n=6)が挙げられた。

「EYL Seminar I」には一部「EYL Fieldwork I」を未受講の学生がいる点を踏まえると、「EYL Fieldwork I」の授業で成長できた点として挙げられていた項目が、ここで課題として挙げられていることに違和感はないかもしれないが、特に言及の多かった「臨機応変(柔軟)な対応力・児童のレベルに応じた指導・状況を察する力」(n=16)については、下記のコメントにある通り「EYL Fieldwork I」で小学校での実習を経験した学生にとっても、前期のごく限られた授業内のみで達成されるものではなく、次に言及の多かった「英語力・コミュニケーション力」(n=10)と同様に、今後も引き続き磨いていくべき能力として認識されていることが推察される。

- ・ 臨機応変に対応できるスキルの必要性については、これは実習の本番で特に痛感したことです。準備していたアクティビティで、練習で予想していなかった子供たちの反応があり、その時は他のメンバーと協力して対応することができました。しかし、これが一人だとどうだっただろうと思います。授業を円滑に進めていくために、フォローアップや予想していなかったことへの対応など、一人でも機転を利かせて対応していけるよう、スキルを身につけていきたいです。(No. 1)
- ・ 自分の想像していた反応とは違う反応が返ってきたときに臨機応変に対応する即座の対応力が私には足りないと思うので、子供たちの反応を見ながら授業を展開できるようになりたい。(No. 25)

また、「子どもたち一人一人への配慮・寄り添う力」(n=6)、を挙げていた点についても、子供たちの学びに真剣に向き合おうとしていること、その上で「状況に応じて対応できる実践教員(adaptive experts または adaptive practitioners)」(Darling-Hammond & Bransford, 2005)を目指そうとする受講生たちの前向きな姿勢が窺える。

## 5. まとめ・今後に向けて

本稿で紹介した「児童英語教育指導員養成コース」内の授業は、筆者の担当が前期であることもあり、いずれの年度も前期までの学習に基づいたものではあるものの、受講者のアンケート回答から本コースにおける省察的実践の教育的な利点が確認されたと言える。主には、下記の3点が挙げられる。

- 1) グループの仲間と協働して授業や教材を計画・作成し、それらを改善する作業を通して、協働的対話が生まれ、指導上の改善点や気づきが得られた点。
- 2) 必修科目として「EYL Fieldwork」での実習体験があることで、実際の児童の様子から直接反応を感じることができ、仲間と共有した経験を基に共に省察できる点。
- 3) 「EYL Seminar」と「EYL Fieldwork」内で、グループで模擬授業をする機会が複数回あり、さらに仲間と対話や省察を繰り返す中で相互に学び合い、その過程から各自が自身の成長を感じられた点。

特に、大学内での模擬授業のみに留まらず、実際の児童に対して授業を行う機会があったことが受講生の達成感や意欲の向上に繋がった様子がみられたことから、Farrell (2019) の提案にある通り、実際の教育現場での実践体験 (service-learning) を組み込むことは、更なる指導力向上への動機付けとなる可能性を示している。また、大学の模擬授業内に於いても、グループ毎に実践して相互にフィードバックすることで、各自の省察の際に、授業に関して良い点を再認識したり、改善点に関して気づきが促された例が見られたことから、受講生が能動的に参加し、他者との意見交換をもとに授業を改善していく過程の重要性についても改めて認識することができた。

前述の通り、本コースの学生が実際に外国語活動を指導するのは初めての経験ということもあり、例年グループでの指導としている。当然、実際に教員になった場合に、3～4人で指導することは稀であることから、現実的でないという指摘もあるかもしれないが、指導経験がないという同じ立場から躊躇なく互いに意見交換して励ましあい、準備に取り組むことができていたことは、受講生からも肯定的に評価されている。また、このように他者と協働的対話を通してひとつの授業を作り上げて実習を体験し、同じ実習経験を基に振り返り、そこから省察の中で得た気づきや学びを再度共有し、改善点を検討するという経験は、受講生の回答にもあった通り、大学の個々の模擬授業のみでは得られない経験であり、貴重な学びの機会であったことが窺える。一方で、少数ではあるが、自由記述形式の回答にあったように、グループでの準備には時間を要すること、授業外での時間的な調整などに課題が残っている点も否めない。しかしながら、結果として、実際に小学校に赴き児童に指導をするという責任感や緊張感の中で、他者との協働をもとに指導内容の充実が図られ、受講者の授業後の達成感に繋がる経験となったことは、この取り組みが各自の指導者としての成長に貢献した可能性が示されたとも言える。

小学校の外国語科の教科化に伴い、ますます質の高い教員や指導員が学校や民間の教育現場においても求められている。また、教育におけるデジタル化推進の影響もあり、指導も変容していくことが予想される。その様な中で、他者と協働的対話や省察を繰り返し、より良い指導を探求する経験をしていることは、受講者が実際に指導者となった際に有益であると考ええる。

最後に、本稿で報告した今回の調査は筆者が担当する前期科目終了時の調査結果に留まったことから、受講生がその後、前期に得た学びを活用して後期に更に同様の経験を重ねた結果、どのように各自の成長に繋がっていったのかについては調査できていない。今後の研究の課題として、本コースを修了した学生に対する調査を行い、省察的実践の取り組みの改善点の検討を深めたい。そして今後も児童英語教育指導員養成コースで受講者が安心して相互に協働しながら学習し、指導員として成長できる環境を提供できるように本コースの更なる充実の可能性を探っていきたいと考える。

#### <謝辞>

本稿で報告した教育活動の意義に賛同し、児童英語教育指導員養成コースの学生に「外国語活動」の授業の機会を与えて下さった福岡市立日佐小学校、福岡市立弥永小学校の先生方、児童の皆様がこの場合を借りて心から感謝申し上げる。

#### <参考・引用文献>

- Darling-Hammond, L. & Bransford, J. (eds.) (2005). *Preparing teachers for a changing world: What teachers should learn and be able to do*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Farr, F. and Riordan, E. (2017). 'Prospective and practicing teachers discuss the theory-practice divide through blogs and e-portfolios', In. Farrell, T. S.C. (ed.) *TESOL VOICES: Insider Accounts of Classroom Life: Preservice teacher education*. Alexandria, VA: TESOL Press.
- Farrell, T. S. C. (2019). Reflective practice in teacher education. In. S. Walsh. and S. Mann. (eds). *The Routledge Handbook of English Language Teacher Education*. (pp. 38-50). Oxon: Routledge.
- Gregersen, T. and Mercer, S. (2022). An appreciative-inquiry and strengths-based approach to pre-service teacher reflection during the practicum. In. Z. Tajeddin. and A. Watanabe. (eds). *Teacher Reflection: Policies, Practices and Impacts*. (pp. 105-119) Bristol: Multilingual Matters.
- Keily, R. and Davis, M. (2010). 'From Transmission to Transformation: Teacher Learning in English for Speakers of Other Languages'. *Language Teaching Research*, 14 (3)277-295.
- Mann, S. and Walsh, S. (2017). *Reflective Practice in English Language Teaching*. New York: Rout-

ledge.

文部科学省(2020).「令和元年度英語教育実施状況調査」[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1415043.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043.htm)

文部科学省(2023).「令和4年度英語教育実施状況調査」[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1415043\\_00004.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043_00004.htm)



